少雨に関する当面の対策

平成１２年7月１７日
生　産　流　通　課

＜水稲＞

１　節水潅がい
　最高分げつ期のものは比較的干ばつに強いが、幼穂形成期～穂ばらみ期のものは絶対に水を必要とするので、生育段階によって計画的、重点的配水を行うことで潅がい水を節約できる。

２　河口付近での河川水の利用について
　河川水をポンプアップして利用する場合は、必ずＥＣをチェックして塩害が生じないように注意する。なお、生育時期によって障害の発生程度が異なるので、利用に当たっては下表を参考にする。

生　育　時　期	Ｅ　Ｃ
幼穂形成期	４ｍＳ／㎝以下
幼穂形成期～穂ばらみ期	３ｍＳ／㎝以下
出穂期以降	４ｍＳ／㎝以下

＊取水にあたっては表面取水するよう留意する。

３　病害虫防除
　高温で干天が続くとカメムシ類の活動が活発となり、また畦畔等の雑草が枯死すると出穂した水田への飛来量が多くなる。また、高温により紋枯れ病の発生が懸念されるので、基幹防除を徹底する。

＜大豆＞

大豆は植物体の増加及び花芽分化が盛んで、この時期土壌水分が不足すると、茎数、分岐数、節数、着蕾数が減り、莢数の減少につながる。

１　転換畑では水田の用水が利用しやすいので、適宜灌水する。その際中耕培土によって出来た畦間が水路として役立つ。

２　灌水の困難な圃場では敷きわら、敷き草等により地表面からの水分蒸散を抑制する。

＜野菜＞

乾燥の他に高温と強い光により被害が発生するので、水の確保、灌水、土壌のマルチ、寒冷紗被覆による遮光等が有効である。被害は移植後等で根張りの浅い時期、根傷みや草勢衰弱を生じたものに出やすい。キャベツの球発育期やスイートコーンの出穂期前後１ヶ月間等発生しやすい場合には注意して管理する。当面は次のような対策を実施する。

１　耕種的対策
- 圃場内の雑草の刈り取り、敷きわら、野草等の敷き草、シルバーポリマルチを行って土壌の乾燥と地温の上昇を防ぐ。
- 灌水チューブ、畝間灌水等適宜灌水する。
- 育苗床や雨除け栽培では寒冷紗等を用いて通風を妨げないよう遮光する。
- 不良果等は早めに除く。

・トマト、ピーマンでは、尻腐れ果が発生しやすくなるので石灰資材の葉面散布をする。
・メロン等のハウス栽培においては、サイドや腰、妻ビニールを可能な限り開けて換気を良くする。萎れがひどい場合はハウス内に散水し湿度を高めるとともに、若干の遮光をして回復を図る。

２　病害虫防除
アブラムシ類（モザイク病）、ハダニ類、スリップス類、軟腐病等が発生しやすくなるので早めに防除する。特に、ハダニ類は高密度になってからの防除は効果が上がりにくいので注意する。

＜果樹＞

乾燥害は、種類、品種により、多様な被害様相を示すが、巻き葉、葉の黄化、次第にはなはだしくなると落葉等のため、枯死する。また、果実は肥大不良、陽光面の日焼け果や生理障害果の発生等のため品質を害する。干ばつ被害は、根張りの不十分な幼木や若木、浅根性の果樹、梅雨期の地下水位上昇で根を傷めた樹で受けやすい。

１　灌水
土壌水分が減少するとまず果実の発育が遅れ、ついで新梢の伸長が止まり、その後枝葉が萎凋するので早めに灌水を始める。土壌水分がｐＦ２．７～３．０まで減少したら乾燥し過ぎない内に１５～２０㎜程度を砂地で５～７日、埴土、埴壌土では７～１０日おきに灌水する。

２　草刈り
草生園では草刈りして水分の競合をさける。

３　有機物マルチの実施
草刈やわらを樹幹下に敷いて土壌表面からの蒸散を少なくし、地温を下げ保水性を高める。必要量は２kg／㎡

４　病害虫防除
干天が続くとハダニ類、カメムシ類、スリップス類等が発生しやすいので、これらの発生に注意して早めに薬剤を散布する。また、ぶどう園では天井ビニールが被覆してあると乾燥によりハダニ類が発生しやすいので、収穫が終われば速やかにビニールを除去する。

＜花き＞

高温、乾燥が続くとキク、アスター、シンテッポウユリ、グラジオラス等の露地栽培の花きへの干ばつの被害が心配される。

干ばつ状態では草丈の伸長が抑制され、葉は黄化し、小さくなり、下葉から枯れ上がるようになる。蕾が膨らんでいるものは花弁の伸びが抑えられ、小輪となり、開花が遅れる。被害が激しくなると葉、花は萎凋し、ついには立ち枯れ状に枯死する。また、高温、乾燥条件下ではハダニ類、アブラムシ類等の病害虫が多発生しやすい。

１　被害対策
・条間、畝間に稲わらや草等でマルチして土壌の乾燥を防ぐ。
・雑草との水分競合を避けるため雑草は刈り取り、または除草剤により枯らす。
・用水の確保に努め、露地で灌水のできる場合は毎日４㎜（１㎡当たり４?）程度の灌水を行う。
・施設栽培では換気に努め内部気温の上昇を抑える。また、必要な場合は一時的に遮光を行う。

２　病害虫対策
野菜の項に準ずる。